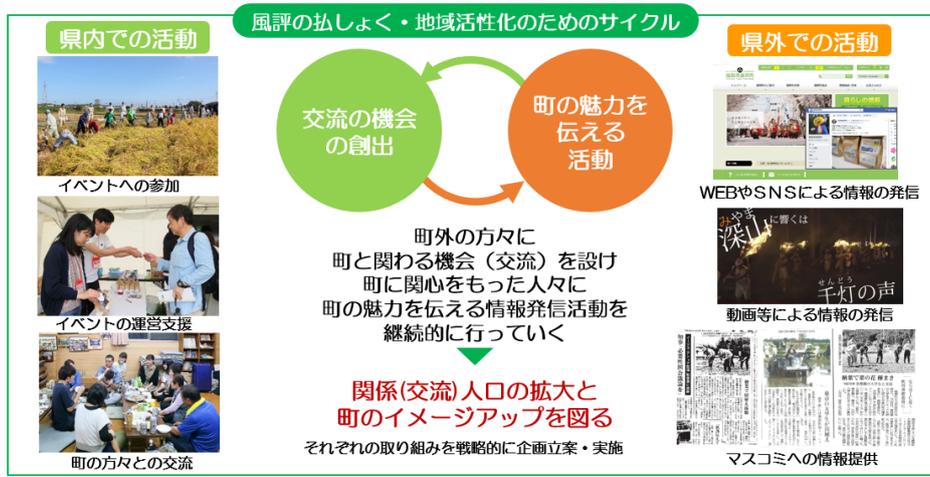


## 事例報告 2 地域活性化への支援

森田重光（環境省福島地方環境事務所 渉外広報課長）

### 地域活性化事業のコンセプト

- 地元の課題を地元の方々とともに考え、地元寄り添いつつ実績を重ねていく
- 県内での交流イベントの成果を県外のイベント等において発信する
- ストーリーのある持続的な活動を行う
- 自走化、産官学の連携、学生ボランティアの活用を特徴とする



### 環境省が進める地域活性化への支援の概要

我々の地域活性化にはコンセプトがあります。1つ目は、地域の課題を地元の方とともに考えることです。地元寄り添いつつ、実績を重ねることを旨としています。県内でいろいろ交流イベントを行っており、例えば学生の方々に福島に関する様々な情報を県外で繰り返し情報発信していただいています。このようなイベントを単発ではなく、ストーリーを持たせ、継続性のある活動としています。

また、例えば自治体による自走化、産官学の連携、学生ボランティアの活用等を特徴としており、様々な主体と連携しながら事業を進めています。国や自治体等、まちづくり会社等の公益事業者、さらには民間企業にもCSRとして支援していただいています。

この中で最も大きな特徴としては、教育機関との強い連携が挙げられます。首都圏を中心に、関西・中国地方、東北地方にも対象を広げ、30校以上の教育機関と協力して、この事業を進めています。ボランティアに参画する学生の組織化を1つ目標としています。

### 学生ボランティアの組織化

学生ボランティアを募る際、首都圏のほか、関西、中国地方においてもボランティア説明会を行っています。この説明会では、放射線の基礎知識に関する講義、ボランティアで訪れる町に関する情報の提供等を行います。自治体の方にご説明いただく機会も設けています。また、大学生だけでなく多くの高校生の方にも参加していただいています。

## 学生ボランティアの組織化

- 首都圏他、関西・中国地方においてボランティア説明会を実施
  - 放射線の基礎知識に関する講義
  - ボランティアで訪れる町に関する情報の提供
- 高校生向けの説明会では保護者への説明も実施



この説明会で、活動の趣旨に賛同いただいた方にメールアドレスを登録していただき、メールマガジンという形でイベント情報やイベントに参加した方々の感想等を配信しています。これまでに、300人近い方に参加していただいています。

### イベント企画の支援

施策の例として、まずイベントの支援ですが、震災で途絶えた伝統的なお祭り等の復活への支援を行っています。具体的には、初年度は補助金の申請からイベントの企画・実施までを全面的に支援します。そして2年目からは、支援しつつも基本的に自走化をしていただきます。

最近の事例としては富岡町春の桜まつりと、秋のえびす講市が挙げられます。桜まつりは復興の集いを含めて3回、えびす講市は2回実施されていますが、いずれもすでに自走化しています。

本日は桜のカードのオブジェをお持ちし

たのですが、これは富岡の桜まつりに来ていただいた方に、富岡の復興に対する思いを書いていただき、さらにこれを東京の新宿御苑に送り、今度は東京の方に福島に対する思いを書いていただいたものです。

このような地元でのイベント、情報を、首都圏で発信しています。その一例が、環境省の関連施設、例えば新宿御苑で開催するイベントでの情報発信です。

新宿御苑を例にすると、外国人の観光客が占める割合は3～4割以上ですから、外国の方にも福島の実情を知っていただけるようにいろいろな工夫を凝らしています。

また、様々なワークショップを行っており、例えば放射線に関する勉強会や実験教室を実施しています。さらには町の方々や学生の方々の要望による勉強会も実施していますし、施設見学ツアー、体験型の実験教室も行っています。

## 具体施策－イベント支援

- 震災で途絶えた伝統的な祭り等の復活を支援
- 初年度は補助金申請からイベントの企画・実施までを全面的に支援
- 基本的に次年度からは自走化



町をPRするワークショップも開催しており、楡葉町で実施しているナラハチャレンジプロジェクトでは、町の小学校の5・6年生が総合的学習の時間に町の魅力を紹介する4種類のCMを作りました。CMを作るのはあくまでも手段で、小学生に町の魅力を発掘していただくのが目的です。この

活動は、現在、大人版を進めています。

また、リスクコミュニケーションも進めており、浜通りでのリスクコミュニケーションは、放射線リスクコミュニケーション相談員支援センターが自治体と共に進めています。

## 具体施策－リスクコミュニケーション

### 「放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター」(いわき市)

- 自治体のニーズを踏まえて、日常生活、健康など様々な観点から放射線に関する不安や疑問に応える支援を実施
- 正確に伝えるというだけでなく、暮らしに通じる身近なテーマに沿った説明、体験的なコンテンツを用意



放射線のリスクコミュニケーションと聞くと、何か難しいことをやっているイメージを持たれる方もいらっしゃるかもしれませんが、例えば、食べ物をテーマにした車座では、参加者の家庭菜園で取れた野菜を題材にして議論したり、あるいは子育てカフェでは、子育て世代の方の今さら聞きにくいなという不安や疑問に答えています。また、事故を知らない子どもたちにも、学校の授業として放射線について学んでいただいています。

さらには、環境省の情報発信施設の見学や体験型学習も取り入れているところです。

最近では、仕事などで、ほかの県から引っ越してきた方々が感じる不安の払拭や、幸せを感じていただけるような環境づくりのお手伝いをしているところです。

教育ツアーでは、たとえば農作業を通じた学習を行っています。田植え、稲刈り等を単発で行うのではなく、1つの水田を借りて、田植え、稲刈りを行い、そこで収穫したお米の試食会やお米の安全性の勉強会も行います。さらには、自分たちが収穫したお米を使って、都内や関西等でPRイベントを行っています。

休耕田を花畑化する事業では、町の方々と休耕田に緑肥植物の種を撒き、花畑化しました。こちらも活動にストーリーを持たせおり、種を撒いて終わりではなく、花が咲く時期には地元の方々と交流をする。交流の後には、例えば地元の方々と郷土料理を作ったり、語り部の話を聞いたりしています。さらには、ここで得た体験を首都圏等で報告する機会も設けています。

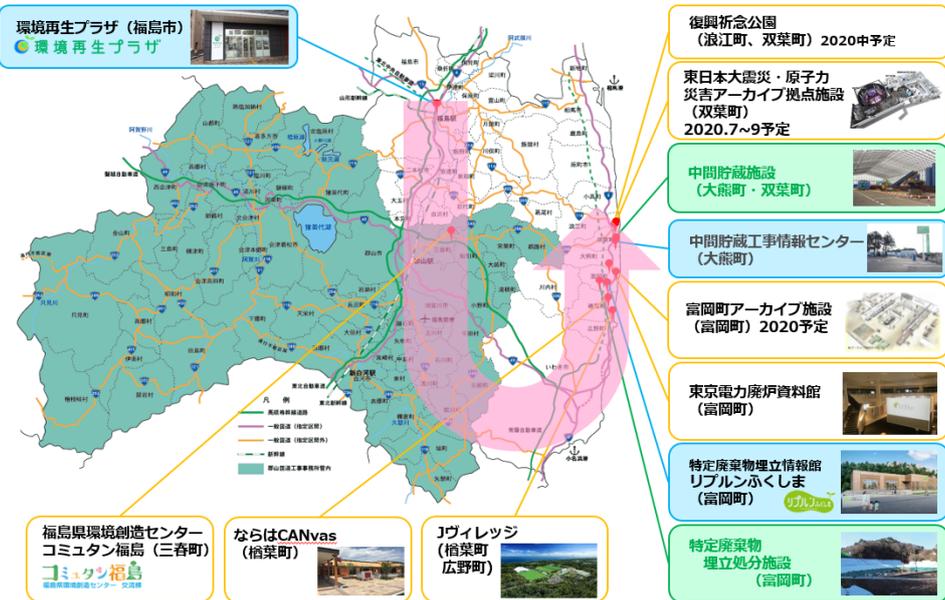
実施事例ですが、学生を対象とした1泊2日のツアーでは、1日目に震災の様子を

「ならはみらい」というまちづくり会社に説明していただき、檜葉町の鮭が遡上する木戸川ではふ化場長から人工ふ化に関する説明を受けました。その後、CSRとして参画している種苗会社から指導を受けながら3ヘクタールの休耕田に播種をし、夜になってからは民泊をして地元の方々と交流していただきました。

2日目には、語り部の方の話を聞き、その後は、「マミーすいとん」という郷土料理と一緒に作って食べる機会を設けました。

1泊2日の短い期間ですが、町の方と学生との間に非常に濃密な関係が生まれ、この会に参加した学生が、その後、何回も自費で檜葉町に来ていると聞いています。

## 情報発信拠点の活用



### 各拠点を繋げて次の展開へ

このようなツアーを通して、県内の情報発信拠点を連携させたいと考えています。福島市には環境再生プラザ、浜通りにはリプルんふくしま、中間貯蔵工事情報センターなどの施設を環境省で運営していますが、他にも浜通りにはアーカイブ施設等、新しい施設ができてきますし、さらに三春にはコミュタン福島もあります。こういった施設をつなげていこうと検討しているところです。

最後に活動に参加した学生ボランティアの声をいくつか紹介します。「町の復興に取り組んだ多くの人々の努力の結果を多くの人々に伝えていくべきだと思います」、「東京での情報発信など町の力になれるような活動を通して、より多くの人に知ってもらえるようになります」、「多くの住民の皆様、環境省の皆様とお話することで、自分が知らなかった震災のこと、原発事故のこと、福島での取り組みを学ぶことができました」

「メディアを通してのみ知れた情報を、自分の目で見て、現地で話を聞くことにより、メディアと現実の相違や、これから福島はどうあるべきかということを知ることができ、微力ながらも私たちが正しい情報を発信していこうと思いました」。

今後も地域の声を丁寧に傾聴して事業を推進する予定です。ご協力をよろしくお願い致します。

## VI パネルディスカッション

### 1 パネラーのみなさま

モデレータ	
大原利眞（おおはら としまさ） 国立研究開発法人国立環境研究所 福島支部フェロー	
パネリスト	
伊藤 泰夫（いとう やすお） 公益財団法人 福島イノベーション・コースト構想推進機構 専務理事兼事務局長	遠藤 秀文（えんどう しゅうぶん） 株式会社ふたば 代表取締役社長
黒沢 知子（くろさわ ともこ） 新地町企画振興課環境未来まちづくり振興係 主任主査兼係長	須藤 治（すどう おさむ） 公益社団法人 福島相双復興推進機構 専務理事
飛田 実（とびた みのる） DOWA エコシステム(株) 代表取締役社長	藤田 壮（ふじた つよし） 国立研究開発法人国立環境研究所 社会環境システム研究センター長 東京工業大学新科学創成領域特任教授
武藤 淳（むとう じゅん） 公益財団法人 福島県観光物産交流協会 観光部長	則久雅司（のりひさ まさし） 環境省環境再生・資源循環局参事官 / 福島再生・未来志向プロジェクトチーム長

